百人秀歌・「百人一首」の謎解明のための予備的考察（3）

――『古今集』「仮名序」第四段後半部分の構造について――

今川仁視

はじめに

『古今集』の「仮名序」は大きく分けると緒論と本論からなっており、緒論は次の四段からなっている。第一段は和歌の性質、第二段は和歌の歴史、第三段は和歌の種類について述べ、最後の第四段で古代と近代の和歌について論評している。

このうち、本稿が考察の対象とするのは第四段である。第四段では、最初に近代和歌の堕落が指摘された後、次に示す本文に見るように、古代の天皇と侍臣との心の交流の媒体として和歌が果たしてきた役割について述べ、さらに臣下の日常のいろいろな生活の中で和歌が果たしてきた役割について述べ、和歌こそ臣下の心を慰めるものであったと結ばれている。

第四段の後半部分の全文は次の通りである。（○付き数字と傍線はいずれも引用者による。）

しかあるのみならず、①さざれ石にたとへ、②筑波山にかけて君をねがひ、③よろこび身に過ぎ、④たのしび心に余り、⑤富士のけぶりによそへて人を恋ひ、⑥松虫の音に友をしのび、⑦⑧高砂・住の江の松も、相生のやうに覚え、⑨男山の昔を思ひ出でて、⑩女郎花のひと時をくねるにも、歌をいひてぞ慰めける。又、⑪春のあしたに花の散るを見、⑫秋の夕暮に⑬木の葉の落つるを聞き、あるは、年毎に⑭⑮鏡の影に見ゆる雪と波とを嘆き、⑯⑰草の露・水の泡を見てわが身をおどろき、あるは、⑱⑲昨日は栄えおごりて、時を失ひ、⑳世にわび、㉑親しかりしも疎くなり、あるは㉒松山の波をかけ、㉓野中の水を汲み、㉔秋萩の下葉をながめ、㉕暁の鴨のはねがきを数へ、あるは、㉖呉竹の憂きふしを人にいひ、㉗吉野川をひきて世の中を恨み来つるに、今は、㉘富士の山も煙立たずなり、㉙長柄の橋もつくるなりと聞く人は、歌にのみぞ心を慰めける。（松田武夫『新釈古今和歌集　上巻』風間書房　一九六八年　一〇七―一〇八頁。以下『新釈上』と略称。）

この第四段の後半部分は次の十四のくだりからなっている。それぞれのくだりは、三を除いてすべて二個乃至三個の語句からなっており、そうした語句は全部で二十九個ある。

①②――一　⑪⑫⑬――六　㉒㉓――十一
③④――二　⑭⑮――七　㉔㉕――十二
⑤――三　⑯⑰――八　㉖㉗――十三
⑥⑦⑧――四　⑱⑲――九　㉘㉙――十四
⑨⑩――五　⑳㉑――十

ところでこの第四段の後半部分の文章について、松田氏は、そのほとんどが「古今集内の和歌を踏まえ、その語句の一部を取って錦繍の如き美文を成している。」（前掲書一一二頁）と指摘されているが、本

稿で検討したいのは、貫之は、この後半部分を執筆するに当たって、「古今集内の」どの「和歌を踏まえ、その語句の一部を取って」、どのように「錦繍の如き美文を成し」たのかという点である。

まず第四段後半部分の大枠について見てみる。貫之が、この冒頭の①「さざれ石にたとへ・・て君をねがひ」の典拠としたのは、「巻第七賀歌」の次の歌である。

三四三　わがきみは千代に八千代にさざれ石の
　　いはほとなりて苔のむすまで

この場合、典拠となるにふさわしい語句をもっている歌は、三四三以外には見当たらないので、典拠歌はこの三四三で決まりである。

次に、貫之が、第四段後半部分の末尾の㉙「長柄の橋もつくるなり」の典拠としたと考えられる歌は、もし彼が「長柄の橋」という語をもっているという点だけに注目したとすれば、次の二首が考えられ、『古今集』の注釈書の中にも、この二首を典拠としてあげているものがある。

八九〇　世の中に古りぬるものは津の国の
　　長柄の橋とわれとなりけり

一〇五一　難波なる長柄の橋もつくるなり
　　今はわが身をなににたとへん

右の二首は、どちらも「長柄の橋」という語をもっており、そういう視点で見れば、㉙「長柄の橋もつくるなり」の典拠歌は、どちらでもよいことになる。

しかしここでは留意すべき点が二つある。その一つは、『古今集』の歌群の歌はどれも、その一首だけが単独で独立して存在することはなく、必ずその前後の歌と共通の語句によって、形式的にも内容的にも連鎖＝関連の中に置かれているということである。

今問題にしている㉙「長柄の橋もつくるなり」の前のくだり、㉘「富士の山も煙立たずなり」の典拠歌は、「巻第十九雑体」の次の歌である。

一〇二八　富士の嶺のならぬ思ひに燃えば燃え
　　神だにけたぬむなしけぶりを

この一〇二八と先の八九〇及び一〇五一を、共通の語句による連鎖という視点で見てみると、次のようになる。

八九〇長柄の橋・古りぬるもの―一〇二八むなしけぶり
一〇五一長柄の橋・つくる　　―一〇二八むなしけぶり

右の二つのケースでは、一〇五一の「つくる」（尽くる）―一〇二八の「むなし」の連鎖の方が、意味内容の面からみてより適切である。

留意すべき二つ目は、第四段後半部分の末尾のくだりの典拠歌一〇五一は、歌集で言えば巻軸歌に相当する。したがって八九〇と一〇五一のいずれが、第四段後半の末尾のくだりの典拠歌として適切であるかは、この第四段後半部分の冒頭の①「さざれ石にかけて・・君をねがい」というくだりの典拠歌三四三「わがきみは」との、共通語句による連鎖の状況を見て判断する必要がある。

八九〇長柄の橋・古りぬるもの―三四三さざれ石・いはほとなり
　　われ―　　わがきみ
一〇五一長柄の橋・つくる　　―三四三さざれ石・いはほとなり
　　わが身―　　わがきみ

右の二組の連鎖を比較すれば、一〇五一の「つくる」（尽くる）―三四三の「さざれ石・いはほとなり」の方が対比がより鮮明であり、したがって一〇五一の方が㉙「長柄の橋もつくるなり」の典拠歌として適切であるということになる。

以上で、第四段後半部分の典拠となった歌群の大枠についての考察を終えたので、次に、いま見た歌群の先頭歌三四三と末尾歌一〇五一の間にある二十七首の歌も含め、この歌群全体について考察することにしたい。

一　第四段後半部分の典拠となった歌とその配列

第四段後半部分は、すでに見たように全体として十四のくだりからなっており、さらにそれぞれのくだりの典拠となった歌を、前稿で解明した『古今集』の歌群の編集方法を基に、松田氏の『新釈上』の注釈における指摘を参考にしながら列挙すると、次の二十九首になる。

一～十四　「　」内の語句―小歌群の主題を示す語句

①～㉙の傍線を引いた語句―第四段後半部分で傍線を引いた語句。短冊型の矩形で囲んだ部分―第四段後半部分の典拠となった語句。

右の内、①～㉙の傍線を引いた語句は、第四段後半部分の二十九の語句をそのまま掲げたものである。

これら二十九の語句は、『古今集』の歌群で言えば、それぞれの歌群に所属する歌の配列順を決め、その歌群の骨格となった一連の語句と同じ性格のものである。

これら二十九の語句の背後には、その典拠となる歌が一首ずつあり、貫之は、『古今集』の編集が一応終わった段階で、今一度、全二十巻の中からこれら二十九首の歌を選び出し、次のように配列し、その上で「仮名序」第四段の後半部分を執筆したと考えられる。

一　「わが君」

①さざれ石にたとへ（君をねがひ）
賀歌、三四三

わがきみは千代に八千代にさざれ石の
いはほとなりて苔のむすまで

②筑波山にかけて君をねがひ
東歌　一〇九五

筑波嶺のこのもかのもに蔭はあれど君がみ蔭にます蔭はなし

二　「よろこび・たのしび」

③よろこび身に過ぎ
雑歌上　八六五

うれしきを何に包まむ唐衣袂ゆたかにたてといはましを

④たのしび心に余り
雑歌上　八六四

思ふどちまどゐせる夜は唐錦たたまく惜しきものにぞありける

三　「おもひ」

⑤富士のけぶりによそへて人を恋ひ
恋歌一　五三四

人知れぬおもひを常にするがなる富士の山こそわが身なりけれ

四　「昔の友」

⑥松虫の音に友をしのび
秋歌上　二〇〇

君しのぶ草にやつるるふるさとは松虫のねぞかなしかりける

⑦⑧高砂・住の江の松も、相生のやうに覚え
雑歌上　九〇九

たれをかも知る人にせむ高砂の松もむかしの友ならなくに

雑歌下　九〇五

われ見ても久しくなりぬ住の江の岸の姫松いくよへぬらむ

五　「さかゆく時」

⑨男山の昔を思ひ出でて
雑歌上　八八九

今こそあれわれも昔は男山さかゆく時もありこしものを

⑩女郎花のひと時をくねる
雑体　一〇一六

秋の野になまめき立てる女郎花あなかしがまし花もひと時

六　「散る花・紅葉」

⑪春のあしたに花の散るを見

春歌下　八四
ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ

⑫秋の夕暮
恋歌五　七七七
来ぬ人をまつ夕暮の秋風はいかに吹けばかわびしかるらむ

⑬木の葉の落つる
秋歌下　二八七
秋は来ぬ紅葉は宿に降りしきぬ道ふみわけて訪ふ人はなし

七　「老い」

⑭⑮鏡の影に見ゆる雪と波とを嘆き
物名　四六〇
むばたまのわが黒かみやかはるらむ鏡の影に降れる白雪

恋歌三　六七一
風吹けば浪うつ岸の松なれやねにあらはれて泣きぬべらなり

八　「あだなる身」

⑯⑰草の露・水の泡を見てわが身をおどろき
哀傷　八六〇
露をなどあだなるものと思ひけむわが身も草に置かぬばかりを

恋歌五　八二七
うきながらけぬる泡ともなりななむながれてとだに頼まれぬ身は

九　「過ぎしさかり」

⑱昨日は栄えおごりて
雑歌上　八八八
いにしへのしづのをだまきいやしきも
よきもさかりはありしものなり

⑲時を失ひ
雑歌上　八九一
笹の葉に降り積む雪のうれを重みもとくだちゆくわが盛りはも

十　「わぶ」

⑳夜にわび
秋歌上　一九九
秋の夜は露こそことに寒からし草むらごとに虫のわぶれば

㉑親しかりしも疎くなり
冬歌　三一五
山里は冬ぞさびしさまさりける人めも草もかれぬと思へば

十一　「もとの心」

㉒松山の波をかけ
東歌　一〇九三
君をおきてあだし心をわがもたば末の松山波も越えなむ

㉓野中の水を汲み
雑歌上　八八七
いにしへの野中の清水ぬるけれどもとの心を知る人ぞ汲む

十二　「ひとり寝」

㉔秋萩の下葉をながめ
秋歌上　二二〇
秋萩の下葉色づく今よりやひとりある人のいねがてにする

㉕暁の鴨のはねがきを数へ
恋歌五　七六一
暁の鴨の羽がきもも羽がき君が来ぬ夜はわれぞ数かく

十三　「憂きふし」

㉖呉竹の憂きふしを人にいひ
雑歌下　九五八
世にふればことの葉繁き呉竹の憂きふしごとに鶯ぞ鳴く

㉗吉野川をひきて世の中を恨み
恋歌五　八二八
ながれては妹背の山の中に落つる吉野の川のよしや世の中

十四　「むなしわが身」

㉘富士の山も煙立たずなり
雑体　一〇二八
富士の嶺のならぬ思ひに燃えば燃え神だにけたぬむなしけぶりを
㉙長柄の橋もつくるなり
雑体　一〇五一
難波なる長柄の橋もつくるなり今はわが身をなににたとへん

右の二十九首のうち、⑦・⑪・㉑の典拠となった歌「たれをかも」・「久方の」・「山里の」の三首は、「百人一首」に採られている。

二　典拠歌二十九首の歌の共通語句による連鎖

いま右に掲げた二十九首の典拠歌が互いに共通の語句によって連鎖している状況を、前稿で解明した『古今集』の歌群の編集方法にしたがって分析すると次のようになる。

傍線を引いた語句は、（小歌群の主題を示す語句）と（その他の共通語句）との連鎖を示す。

（歌番号）（小歌群の主題を示す語句）　（その他の共通語句）

一　「わが君」

三四三　※わがきみは千代に八千代に　※いはほとなり
一〇九五　君　み蔭

二　「よろこび・たのしび」

八六五　うれしき　唐衣
八六四　たたまく惜しき　唐錦

三　「おもひ」

五三四　人知れぬおもひ

四　「昔の友」

二〇〇　君しのぶ・ふるさと　松虫
九〇九　むかしの友　高砂の松
九〇五　われ見ても久しくなりぬ　住の江の姫松

五　「さかゆく時」

八八九　さかゆく時・昔　男山
一〇一六　花もひと時　女郎花　かしがまし

六　「散る花・紅葉」

八四　光のどけき春の日・花の散る　しづ心なく
七七七　夕暮・秋風・吹けば　来ぬ人をまつ
二七二　秋・紅葉・降りしきぬ　訪ふ人もなし

七　「老い」

四六〇　鏡の影・降れる白雪
六七一　松・ねにあらはれ　かはる

八　「あだなる身」

八六〇　あだなるもの・露・わが身
八二七　けぬる泡・頼まれぬ身

九　「過ぎしさかり」

八八八　さかりはありし　を（麻・苧）
八九一　もとくだちゆくわが盛り　笹の葉　雪

十　「わぶ」

一九九　秋の夜・わぶ　草むら　露
三一五　さびしさ　草　ひとめもかれぬ

十一　「もとの心」

一〇九三　あだし心　君をおきて
八八七　もとの心　いにしへ

十二　「ひとり寝」

二二〇　ひとりある人・いねがて　今
七六一　君が来ぬ夜・数かく　鳴

十三　「憂きふし」

九五八　呉竹の憂きふし・世　……鶯
八二八　よしや世の中　……妹背の山

十四　「むなしわが身」

一〇二八　むなしけぶり　……富士の嶺
一〇五一　※わが身・※つくる

右の一〇五一の※「わが身」と※「つくる」は、この歌群の先頭歌三四三の※「わがきみ」※「いわほとなり」と連鎖しており、右の二十九首からなる歌群は、全体として円環的に連鎖して一つの歌群を構成していることを示している。

注　一〇五一の「つくる」の語意は、この歌だけを孤立的に取り挙げる場合には、「造る」と「尽くる」のどちらにも解釈でき、『新釈下』（九〇八―九一〇頁）と後で取り上げる『新大系版』（三一九頁）は、いずれも「造る」を採っている。しかし一〇五一は、「仮名序」では、同じく典拠となった直前の歌一〇二八と、「つくる」―「むなしけぶり」という共通の語句で連鎖しており、さらにいま右に指摘したように、この歌群の先頭の歌三四三とは、「いわほとなりて」という共通の語句によって連鎖している。したがって「仮名序」における「つくる」の解釈としては「尽くる」と解釈するのが適当あると考えられる。

なお、曽根誠一氏は、「興風集」や『千載集』の事例を挙げ、「長柄の橋」は「朽ち『つくる』橋として詠歌されるほうが一般的であった。」（『歌ことば歌枕大辞典』久保田・馬場編　角川書店一九九九年　六二七頁）と指摘されている。

以上の考察は、「仮名序」第四段の後半部分の典拠となった一首ずつの歌が、それぞれ「小歌群の主題を示す語句」と「その他の共通語句」によって互いに緊密に連鎖していることを示している。

しかし『古今集』の従来の注釈書は、一つの語句の典拠となっている歌を、一首ではなく二首あるいはそれ以上挙げている場合が少なくない。そこで次に、それらの注釈書が、先に掲げた二十九首以外の歌を典拠歌として掲げている場合、それらの歌が、果たして第四段の後半部分の確実な典拠と言えるかどうかについて検討する。

百人秀歌・「百人一首」の謎解明のための予備的考察（3）

第四段の典拠歌について注釈書の指摘はどれも似たり寄ったりなので、ここでは、それらの中から『新釈上』（一一〇―一一二頁）と小島憲之・新井栄蔵校注『古今和歌集』（岩波書店　一九八九年。一一一―一二頁。新日本古典文学大系5。『新大系版』と略称。）の見解だけを取り上げることにした。

三　『新釈上』と『新大系版』の見解の検討

典拠となる歌に関する本稿と『新釈上』及び『新大系版』の見解の異同を表にまとめると次のようになる。

■印―本稿の先に掲げた典拠歌と異なる場合。
傍線を引いた歌番号―本稿の見解と異なるもの。

「仮名序」本文の初句	典拠歌の歌番号 本稿	新釈上	新大系版
①さざれ石	三四三	三四三	三四三
■②筑波山	一〇九五	一〇九五	九六六 一〇九五
③よろこび	八六五	八六五	八六五
■④たのしび	八六四	×	一〇六九
■⑤富士のけぶり	五三四	五三四	五三四 一〇二八
■⑥松虫の	二〇〇	二〇〇～	二〇〇 二〇一 二〇二 二〇三
■⑦高砂の		九〇八 九〇九	九〇八 九〇九
■⑧住の江の	九〇九 九〇五	九〇五	九〇五

⑨男山の	八八九	九〇六	九〇六
■⑩女郎花		八八九	八八九
	一〇一六	一〇一六	二二六～一〇一六
■⑪春のあした	八四	×	一〇四～
■⑫秋の夕暮	七七七	×	二八一～
⑬木の葉の落つる	二八七	×	×
⑭鏡の影（雪）	四六〇	四六〇	四六〇
■⑮鏡の影（波）	六七一	一〇〇三	×
⑯草の露	八六〇	八六〇	八六〇
⑰水の泡	八二七	八二七	八二七
■⑱昨日は栄え	八八八	八八八～	八八八～九六一～
⑲時を失ひ	八九一	×	×
⑳親しかりし	三一五	×	×
㉑夜にわび	一九九	×	×
㉒松山の	一〇九三	一〇九三	一〇九三
㉓野中の水	八八七	八八七	八八七
㉔秋萩の	二二〇	二二〇	二二〇
㉕暁の	七六一	七六一	七六一
㉖呉竹の	九五八	九五八	九五八
㉗吉野川	八二八	八二八	八二八
■㉘富士の山		五三四	五三四
	一〇二八	一〇二八	一〇二八
■㉙長柄の橋		八九〇	八九〇
	一〇五一		一〇五一

次に、右の一覧表に挙げた歌番号のうち、『新釈上』と『新大系版』が典拠歌としてあげた歌の番号が、本稿で先に挙げた歌番号と異なる場合について検討する。

■②「筑波山にかけて君をねがひ」の典拠

このくだりの典拠は、私の考えるところでは次の一首だけである。

一〇九五　筑波嶺のこのもかのもに蔭はあれど
　　君がみ蔭にます蔭はなし

『新大系版』は、右の歌の他に、次の歌を典拠として挙げている。

九六六　筑波嶺のこのもとごとに立ちぞ寄る
　　春のみ山のかげを恋ひつつ

この九六六は、「筑波山にかけて君をねがひ」のくだりにある「筑波山」と類似の「筑波嶺」の語を含んでいる。

しかしこの九六六が、私が典拠として挙げた一〇九五同様、②のくだりの典拠歌であるなら、①「さざれ石にたとへ」のくだりの典拠となっている次の歌―

三四三　わがきみは千代に八千代にさざれ石の
　　いはほとなりて苔のむすまで

と共通する語句を含んではずである。ところが九六六は、右の三四三と連鎖する語句は一切含んでおらず、したがってこれら二首の間に共通の語句による連鎖は見られない。

それだけではない。この九六六は、意味内容の点でも、「仮名序」の②「筑波山にかけて君をねがひ」というくだりとは何ら共通するところはない。

このように見てくると、『新大系板』のように、九六六が、②「筑波山にかけて君をねがい」というくだりにある「筑波山」という類似の語をもっているというただそれだけの理由から、九六六を②のくだりの典拠とするのは安易すぎる。

この安易さは、『新大系版』の校注者の、『古今集』の歌群の編集方法の把握の不十分さと無縁ではないであろう。

■④「たのしび心に余り」の典拠

右のくだりの典拠は次の歌である。

八六四　思ふどちまどゐせる夜は唐錦
　　たたまくをしきものにぞありける

ところが『新体系版』は次の歌を典拠として挙げている。

一〇六九　あたらしき年の始めにかくしこそ
　　ちとせをかねてたのしきをつめ

しかし「たのしきをつめ」は「たのしび心に余り」と意味が異なるので、④の典拠としてこの一〇六九を挙げるのは見当違いである。

■⑤「富士のけぶりによそへて人を恋ひ」の典拠

右のくだりの典拠は、

五三四　人知れぬおもひを常にするがなる
　　富士の山こそわが身なりけれ

である。

『新大系版』は、この五三四の他に、典拠として次の歌―

一〇二八　富士の嶺のならぬ思ひに燃えば燃え
　　神だにけたぬむなしけぶりを

も挙げている。この理由も、先の「筑波山」の典拠歌の場合と基本的に同じで、この一〇二八が、⑤「富士のけぶり」の「富士」と共通する「富士の嶺」という語を含んでいるからであろう。

しかし、もし貫之がこの一〇二八を⑤「富士のけぶりによそへて人を恋ひ」の典拠としたのなら、⑤のくだりの前にある④「たのしび心にあまり」のくだりの典拠となった次の歌―

八六四　思ふどちまどゐせる夜は唐錦
　　たたまく惜しきものにぞありける

との間に、語句の面でも意味内容の面でも連鎖を見い出すことができるはずである。しかし八六四と一〇二八の間にそうした連鎖を発見することはできず、したがって貫之が⑤のくだりの典拠としたのは五三四だけである。

■⑥「松虫の音に友をしのび」の典拠

このくだりの典拠は次の歌である。

二〇〇　君しのぶ草にやつるるふるさとは
　　松虫のねぞかなしかりける

『新大系版』は、次の三首も⑥のくだりの典拠と明記している。理由は、三首がいずれも「松虫」という語をもっているからである。

二〇一　秋の野に道もまどひぬ松虫の声する方に宿やからまし
二〇二　秋の野に人まつ虫の声すなり
　　我かと行きていざとぶらはむ
二〇三　もみぢ葉の散りて積れるわが宿に
　　たれをまつ虫ここら鳴くらむ

しかし、⑥「松虫の音に友をしのび」のくだりは、次の⑦⑧「高砂住の江の松も相生のやうにおぼえ」のくだりと密接につながっており、この「松虫の音に友をしのび」のくだりの力点も、「松虫」にではなく「友をしのび」にある。したがって二〇一や二〇二・二〇三がただ「松虫」という語をもっているからという理由から、直ちにこれら三首を二〇〇の典拠であると判断するのは早計である。

■⑦⑧「高砂・住の江の松も相生ひのようにおぼえ」の典拠

右のくだりの典拠になっているのは次の二首である。

九〇九　たれをかも知る人にせむ高砂の松も昔の友ならなくに
九〇五　われ見ても久しくなりぬ住の江の岸の姫松いくよへぬらむ

『新釈上』と『新大系版』は、「高砂の松」の典拠として右の九〇九の他に九〇八を挙げ、「住の江の松」の方の典拠として九〇五の他に九〇六を挙げている。理由は、これまでと同様、九〇八は「高砂の岸の姫松」を含んでおり、九〇六は「住の江の松」を含んでいるということだけであろう。

■⑩「女郎花のひと時をくねる」の典拠

このくだりの典拠として正しいのは、次の歌―

一〇一六　秋の野になまめき立てる女郎花あなかしがまし花もひと時だけである。

『新釈上』は、二二六から二三八に至る十三首が「女郎花」という語を含んでいるという理由から、この十三首すべてを典拠としている。

しかし、右に⑩のくだりの典拠として挙げた一〇一六の前にある「男山の昔」の典拠は、次の―

八八九　今こそあれわれも昔は男山さか行く時もありこしものを

である。この八八九を、『新釈上』が⑩のくだりの典拠とする「女郎花」の歌群の一首、例えばこの歌群の先頭に置かれている僧正遍昭の滑稽味のある次の歌と比較してみよう。

二二六　名にめでて折れるばかりぞ女郎花
　　われおちにきと人に語るな

両者はともに「女郎花」という語を含んでいるが、しかし右の二二六の意味内容は、⑩のくだりの力点がおかれている「花もひととき」とは全く無縁である。

以上、『新釈上』と『新大系版』の見解について見てきたが、これらの注釈書の見解は、⑩以降のくだりについても基本的に変わらないので、「仮名序」第四段の後半部分の典拠についての検討はこの辺で措くことにしたい。

本稿のこれまでの考察結果をまとめると次のようになる。

1．「仮名序」第四段の後半部分の背景になっていたのは、先ほど提示した二十九首の歌からなる歌群であった。逆に言うと、二十九首からなる歌群を基にしながら、一連の語句によって物語を浮き彫りにしたものが、「仮名序」第四段の後半部分の本文であったのである。

2．この二十九首からなる歌群の特徴は次の通りであった。

i　十四の小歌群に分かれている。

ii　小歌群は原則として二首以上の歌からなっている。

iii　小歌群は歌群としての主題をもっている。

iv　小歌群に属する歌は「歌群の主題を示す語句」と「その他の共通語句」によって前後の歌と連鎖し二首を基本に組合されている。

v　二十九首の歌の配列順は、歌がもっている語句の連鎖によって

「仮名序」第四段後半部分の内容を表現する順に配列されている。

以上で「予備的考察」（1）で当面の検討課題とした、織田氏による「百人一首」の配列復元図の最も重要な骨格になっている「風」の歌群について考察するための準備は一応整ったと考えられる。

四　織田説の「風」の歌群についての検討

織田説の「風」の歌群は、次の十三首で構成されている。（歌の本文は樋口芳麻呂校注『王朝秀歌選』岩波文庫　一九八三年　に依る。傍線は織田氏の『絢爛たる暗号』集英社　一九七八年　一八四頁による。）

七四　**憂かりける人をはつせの山おろしよ**
　　激しかれとは祈らぬものを　（俊頼）

二二　**吹くからに秋の草木のしをるれば**
　　むべ山風を嵐と言いふらむ

九六　花誘ふ嵐の庭の雪ならでふりゆくものは我が身なりけり

六九　嵐吹く三室の山のもみぢ葉は竜田の川の錦なりけり

三二　山川に風のかけたるしがらみは流れもあへぬ紅葉なりけり

一二　**天つ風雲の通ひ路ふき閉ぢよをとめの姿しばしとどめむ**

七一　**夕されば門田の稲葉おとづれて葦のまろ屋に秋風ぞ吹く**

七九　秋風にたなびく雲の絶え間より
　　もれ出づる月の影のさやけさ

三七　白露に風の吹きしく秋の野は貫きとめぬ玉ぞ散りけり

四八　風をいたみ岩うつ波のおのれのみ砕けて物を思ふころかな

五八　有馬山猪名の笹原風吹けばいでそよ人を忘れやはする
九八　風そよぐ楢の小川の夕暮は禊ぞ夏のしるしなりける
九七　来ぬ人をまつほの浦の夕凪に
　　焼くや藻塩の身も焦がれつつ　（定家）

注　『絢爛たる暗号』の一八四頁に掲載されている「風」の歌群では、三十二番の歌「山川の」が抜けているが、一九八頁の「風」の歌群では入っているので補充した。

また、九四番の歌「み吉野の」も「秋風」という語を含んでいるが、『絢爛たる暗号』の後で書かれた『謎の歌集／百人一首』（筑摩書房　一九八九年一月）では、この九四は、「風」の歌群ではなく「吉野」の歌群に入っているので（二三八―二三九頁）、ここでは後者の見解にしたがい、九四を除外した。

織田氏は、「百人一首」の百首の中から選んで配列された右の「風」の歌群について、『百人一首の謎』（講談社現代新書　一九八九年十二月）の中で次のように説明されている。

「『風』は俊頼の七四『山おろし』から、康秀の二二歌で『山』『風』という文字の合成によって『嵐』になる。桜花を散らせる嵐、紅葉を散らせる風、そして秋風、激しく吹く風からそよ風になり、定家自身の歌の『凪』で風は静止する。

・・この配列が・・・ほぼ定家の構想をとらえることができたのではないかと考えている。」（一一四頁）と。

織田氏が掲示された「風」の歌群の問題点がどこにあるかは、それぞれの歌がもっている（歌の主題を示す語句）と（その他の共通語句）とを摘記するとよく分かる。

（歌番号）（歌の主題示す語句）　（その他の共通語句）

「七四　**山おろしよ・激しかれとは祈らぬ**　風
二二　**山風を嵐と言う**　嵐
九六　ふりゆくものは我が身
六九　もみぢ葉・川の錦なり　嵐　三室の山

百人秀歌・「百人一首」の謎解明のための予備的考察（3）

三二　しがらみ・川の紅葉なり　風　山川
一二　**天つ風・吹き閉とぢよ**
「七一　**秋風ぞ吹く**　秋風
七九　もれ出づる月の影
三七　秋の野・玉ぞ散る　風
四八　おのれのみ・物を思ふ
五八　そよ人を忘れやはする　風吹けば
九八　禊ぞ夏のしるし　風そよぐ・夕暮
九七　来ぬ人をまつ　夕凪

右の上段の、十三首の（歌の主題を示す語句）を一見すれば明らかなように、それぞれの歌の主題を示す語句の内容はばらばらで、本来の歌群が当然もっておるべき歌群としての一貫した主題がない。これは、織田説の「風」の歌群が、ただ「風」という共通語をもっているからというだけの理由で歌が拾い集められ、言わば風の吹くままに配列されたことに原因がある。

織田説でいう「風」の歌群が本来の「風」の歌群でない以上、この歌群を骨格として「百人一首」の配列復元図を構想することは適当ではないと言わざるをえない。

ただ織田説でいう「風」の歌群には、本来の歌群と認めることが出来るものが二つだけ含まれている。七四及び二二からなる歌群と一二及び七一からなる歌群がそれである。

また織田説の「風」以外の歌群では、次の「ひとり寝」の歌群も本来の歌群と認めることができる。

三　あしびきの山鳥の尾の垂り尾の長々し夜を独りかも寝む
九一　きりぎりす鳴くや霜夜のさむしろに
　　衣片敷き独りかも寝む
　　（前掲書　二〇二頁）

注　次の二首は「独り寝」を示す語句が歌の主題になっていないので、「独り寝」

の歌群に含めることはできないが、右の二首となんらかの形で対になっているのではないかと思われる。

五三　なげきつつ独り寝る夜のあくる間はいかに久しきものとかはしる

五九　やすらはで寝なましものを小夜ふけてかたぶくまでの月を見しかな

こうした織田氏が挙げられた歌群の中の本来の歌群は、いずれも今後「百人一首」のより現実的な配列復元図を構想する際の一つの重要な契機とすることができるのではないかと考えられる。

氏は、『絢爛たる暗号』の最後の章の冒頭で、自らの研究結果を要約して次のように述べておられる。

「隠岐の後鳥羽院を思い、亡き式子内親王をしのぶ心を古今の歌百首の中に匿したのが「百人一首」（小倉山荘色紙和歌）であり、「百人一首」と「百人秀歌」は同時に成立した一対の百首歌であった。「百人一首」とは百余首の和歌で綴った絢爛たる暗号だったのである。」（二七三頁。傍線は引用者による。）

織田氏の右の見解は、「百人一首」の百首の歌がもっている共通の語句を「暗号」と捉えている点、「百人一首」は「隠岐の後鳥羽院を思い、亡き式子内親王を偲ぶ」という二つのテーマで編まれているとしている点、さらに百人秀歌と「百人一首」が同時に成立したとしている点に問題があり、中でも、「百人一首」の歌をつないでいる共通の語句を言語遊戯的な「暗号」とされた点は、前稿と本稿の考察結果に照らすと、修正を要する点である。

織田氏が「百人一首」の歌の中に発見された共通の語句は「暗号」ではなくて、実は『古今集』の編者が歌群を編集する際に念頭に置いていたのと同様の基準であり、氏の観察は、そうした基準を直感的表面的にとらえるにとどまったのである。

◇　◇　◇

前稿と本稿の考察結果からすると、定家も、「百人一首」を編集するに当たって、貫之らが『古今集』の歌群を編集した際に採用した基準と基本的には同じ基準、すなわち①歌群の主題を示す語句、②その他の共通語句、③配列順を決めるための一連の語句の三つを援用したのではないかと考えられる。

したがって、「百人一首」の原型の配列を復元するには、これらの基準にしたがって、今後その周辺資料を分析することが必要であると考えられる。

（参考文献）―本文で引用したものを除く―

『古今和歌集』日本古典文学大系　岩波書店　佐伯梅友校注　一九五八年

『古今和歌集』新潮日本古典集成　奥村恒哉校注　新潮社　一九七八年

『古今和歌集』（一）全訳注　久曽神昇　講談社学術文庫　一九七九年

『古今和歌集』対訳古典シリーズ　小町谷照彦校注　旺文社　一九八八年

『古今和歌集全評釈』（上）　片桐洋一　講談社　一九九八年

『古今和歌集成立論　研究編』久曽神昇　風間書房　一九六一年

『古今集の構造に関する研究』松田武夫　風間書房　一九六五年

『古今集　新古今集の方法』浅田徹・藤平泉編　笠間書院　二〇〇四年

『古今和歌集研究集成』全三巻　増田繁夫・小町谷照彦・鈴木日出男・藤原克己編　風間書房　二〇〇四年

「『古今集』の成立時期について」樋口芳麻呂（『名古屋平安文学研究会会報』第九号　一九八二年十二月　名古屋平安文学研究会）

本誌前号拙稿「予備的考察(2)」の正誤表

12頁　下段　㊀12行　騎旅　→羇旅

12頁　下段　㊀06行　春は来きにけり→春は来にけり

（後者の歌本文の訂正については、以下同じ）

二〇〇五・一二・二六

（元東海女子高校教諭）